

平成21年6月15日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18520149  
 研究課題名（和文） 1930年代における大衆消費社会の生成とメディアをめぐる総合研究  
 研究課題名（英文） The comprehensive study of the relation between the growth of the mass consumer society and the media in the 1930s  
 研究代表者  
 安田 孝（YASUDA TAKASI）  
 神戸女子大学・文学部・教授  
 研究者番号：50117727

研究成果の概要：1920年代後半から1930年代にかけて、大量印刷技術、カメラ、ラジオといった尖端的なテクノロジーの出現に伴い、「文化」が一部の人の占有ではなくなり、より広範な階層に享受された諸相を解明した。これまでの活字メディアである新聞や雑誌も新たな読者を獲得するためにこうしたテクノロジーを積極的に取り入れたことを明らかにした。写真をも一つのケース・スタディとして取り上げ、メディア・ミックス状況について考察した。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,600,000	0	1,600,000
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	540,000	3,940,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：日本文学・文化研究・メディア

## 1. 研究開始当初の背景

出版なら出版、映画なら映画に関するそれぞれの研究領域では一定の成果が上げられていた。しかし、いわゆるメディア・ミックスの観点から、大衆が享受層として登場する、この時期の社会状況と文学との関連を分析する試みはほとんどなされていなかった。文学者もこうしたメディア・ミックス状況の中で活動したにもかかわらず、これまでは作家研究・作品研究が中心であり、メディアとの関連性で考察された事もほとんどなかつ

た。

## 2. 研究の目的

大量印刷技術、カメラ、ラジオ放送といった尖端的なテクノロジーを用いて、さまざまなメディアが新たな享受層の獲得をめざした社会状況を解明する。「文化」が一部の人々の占有でなくなり、より広範な階層に享受されるようになる過程を解明する。

### 3. 研究の方法

文献資料に限らず、写真や映画などの映像資料も収集し、それらをメディア・ミックスの観点から分析する。

公開研究会を開催する。特にこの研究課題に関心がある若手研究者に報告を依頼する。その報告を踏まえて、参加者が意見を交換し、各々の理解を深める。

### 4. 研究成果

大量印刷技術やカメラやラジオといった尖端的なテクノロジーが大衆的な享受層にもたらしたメディア・ミックス状況を解明した。

- (1) 1925年7月に東京放送局がラジオ放送を開始する以前に、雑誌がラジオを特集に取り上げたり、新聞社が公開実験放送のイベントを開催したりした。新たなメディアであるラジオ放送と従来の活字メディアとは対立関係にあったわけではない。印刷技術の開発によって大量部数の刊行が可能になった活字メディアは、より多くの読者を獲得するためにラジオに対する大衆の関心を利用したのである。

文学者もこうした動向と無関係でなかった。小山内薫、久米正雄などによってラジオ研究会が組織され、8月13日には、セリフと効果音のみを用いた「炭鉱の中」が放送された。ラジオ放送に出演した作家の感想が雑誌などに掲載された。ラジオ放送は当事者たちの予想を超えた勢いで享受層を拡大していった。

海野十三は1919年に早稲田本科学理工科に入学し無線通信を学んだ。

『無線と通信』などに記事を發表した。「省線電車の射撃手」(『新青年』1931)などラジオ放送をトリックに用いた小説を次々に発表した。ラジオ放送に関する知識が読者に普及していることを前提にして書かれたことは言うまでもない。

- (2) 1920年代後半から、東京、大阪、名古屋といった都市部に急激な人口の流入があった。関東大震災の被害を受けた東京ばかりでなく、大阪や名古屋でも道路の拡張、コンクリート造りのビルの建設などといった生活空間としての都市の整備が進められた。新たな都市の景観は写真、ルポルタージュ、詩、小説などの対象として取り上げられるようになる。モダニズムの影響を受けた写真家、文学者はビルの幾何学的なフォルムや鉄骨の組み合わせなどに美を認めたのである。一方、プロレタリア派の詩人である田木繁

は「工場—機械は目の前に厳存している。手に触れることが出来る。それを綿密に観察、記述することによって、精神の基礎にすることが出来る」と考え、『機械詩集』(1937年)を刊行した。田木は労働する身体を媒介にして機械と一体となり、身体と機械を往還させるような独自の表現方法を獲得した。

これまでの文学研究のようにプロレタリア派と芸術派とを対立的にとらえるのでは、この「機械」のモチーフが広く流通した位相をとらえることはできない。

- (3) 1925年に発売されたライカは手軽に持ち運びが出来る機能性において写真の撮影を格段に進展させた。「目で見ると同時にシャッターが押せる」点に注目した木村伊兵衛はスナップショットという、まさにある瞬間の光景や人物を撮影した写真を生み出した。『犯罪科学』は、こうした写真を組み合わせたフォトモンタージュを用いたグラビア記事を掲載した。現実の断片の組み合わせから読者は一つの物語を読み取ることになる。

現実と物語との相互連関は推理小説の分野でも認められる。1925年前後、江戸川乱歩がフィクションとしての本格推理小説を發表した。その一方で、実際に起きた事件を題材にした犯罪実話小説が發表された。甲賀三郎の「支倉事件」(『讀賣新聞』1927年1月~6月)である。もちろん、明治時代以来、新聞と実話との結びつきはあったが、一人の作家の長篇小説としては甲賀の作品がはじめてであった。ついで、山本禾太郎の『小笛事件』(『神戸新聞』1932)が發表された。『新青年』の編集長だった森下雨村は飽くまでも事実を離れず、しかも推理小説以上の興味を覚えさせると評した。

- (4) 谷崎潤一郎は写真に深い関心を寄せていた。「細雪」の平安神宮の花見の場面で貞之助はライカで写真を撮影している。谷崎に外国の写真技術に関する情報を伝えたのは、(これまで指摘されたことがないが)小学校以来の親友である笹沼源之助であった。笹沼は東京高等工業学校に入学し、卒業後は、父のあとを継いで中国料理店の経営に携わった。谷崎のパトロンともいえる人物である。自宅に暗室を設けるほど写真撮影に深い関心を抱いていた。1926年にライカが輸入されると早速購入した。いっぽう、「細雪」中巻には、洪水の

ときに、安否のわからない妹の身を案じた幸子が、妹の写真を見ている思いをめぐらす様子が描かれている。写真に映っているのは、かつて実際に存在した人物であり風景である。写真が「事実」を記録したものであることに違いはないが、それを見る人がだれでも同じ「事実」を認識するわけではない。幸子は妹が死んだかもしれないと思いこんでしまう。

- (5) 樋口一葉のイメージは一枚の写真をもとに形作られてゆく。日本画家の鏑木清方が参考にしたと言う『一葉全集』(1912)に掲載された写真である。しかし、1939年に公開された並木鏡太郎監督の「樋口一葉」や西条八十の「樋口一葉薄命哀詩」に岩田専太郎が描いた挿し絵から新たな一葉のイメージが生み出される。一葉の小説を原作にした映画を見た人の中には、「一葉の小説を読んだことはないし、又一葉の写真さへも見た事がない」が映画の通りの人物だろうと述べる者もでてくる。いわばコピーのコピーを受け入れているわけだが、そのことに疑問を覚えていない。
- (6) 1899年高等女学校令の施行の一つの契機にして「少女」という概念が「少年」(本来、年の若い者と言う意味である)という概念から分離して用いられるようになった。1906年には『少女世界』が、1908年には『少女の友』が刊行された。しかし、雑誌の挿し絵に描かれた「少女」のイメージは、幼いものと10代半ばくらいのものにと大別され、年令も身なりも、のちのように固定化していない。1920年代後半から、竹久夢二の描いた「少女」のイメージをうけ、落谷虹児や高島華宵や中原淳一などが、少女を読者層にした雑誌にさまざまな「少女」のイメージを描くようになる。そこに描かれたファッションや目の表情・しぐさなどが少女の間に広まっていく。コピーのコピーを受け入れているわけである。
- (7) 谷崎潤一郎の「途上」(1920年)には「私立探偵」—日本には珍しい此の職業が、東京にも五六軒出来た(…)」と述べられている。明治期の「探偵」は、日本最初の創作探偵小説である黒岩涙香の「無惨」(1899年)では警官刑事と分離されていないし、漱石「吾輩は猫である」などではネガティブな面が強調されていた。しかし、大正期に入ると、「探偵」イメージが刷新される。松崎天民『探偵ロ

マンス』(1915年)や、実際に探偵事務所を開いた岩井三郎『探偵実話魔鏡』(1915年)といった実話物とともに、「探偵」のイメージアップに貢献したのは写真であった。『探偵ロマンス』に掲載された「事務室に於ける岩井探偵長」の写真、整然とした西洋間に腰掛けた威風堂々たる紳士の風貌は、旧来の探偵のイメージのいかかわしさを払拭して余りあるものである。明智小五郎に代表される1930年代における探偵小説ブームも、こうした新たな「探偵」イメージが確立したことをふまえて成立したのである。

- (8) 1920年代は犯罪や探偵に関する知識が「大衆科学」と踵を接して広く流通した。平田潤雄・秋間保郎『現代式探偵科学』(1928年)は「最近に於ける読書界の趨勢として、探偵小説、大衆科学が最も耽読される」と述べているが、1921年創刊の『科学知識』、1923年創刊の『科学画報』といった大衆向け科学雑誌やおおくの啓蒙的科学書が伝える知識とリンクする形で、科学的な犯罪操作方法が大衆に浸透していった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ①馬場伸彦、「堀野正雄とグラフ・モンタージュ—再構成されるメディアの現実」、『甲南女子大学研究紀要』、査読有、44、2008、75—88
- ②安田孝、「「細雪」と写真」、『神女大國文』、査読有、18、2007、71—81

[学会発表] (計0件)

[図書] (計4件)

- ①馬場伸彦、「青年都市の青年詩人たち—春山行夫と名古屋のモダニズム詩誌をめぐって」、風媒社、『〈東海〉を読む 近代空間と文学』、2009、184—202
- ②馬場伸彦、ゆまに書房、『機械と芸術 コレクション・モダン都市文化45』エッセイ・解題・関連年表・参考文献、2009、609—666
- ③吉田司雄、ゆまに書房、『探偵と小説 コレクション・モダン都市文化40』、2008、709—770
- ④馬場伸彦、不二出版、『犯罪科学』解説・総目次・索引』、2008、7—37

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

○ 取得状況（計0件）

○ 〔その他〕

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

安田 孝 (YASUDA TAKASI)

神戸女子大学・文学部・教授

5 0 1 1 7 7 2 7

### (2)研究分担者

吉田 司雄(YOSIDA MORIO)

工学院大学・工学部・教授

5 0 2 9 6 7 7 9

馬場 伸彦 (BABA NOBUHIKO)

甲南女子大学・文学部・准教授

0 0 4 1 1 8 4 3

### (3)連携研究者